

コロナ禍における学内ダンス公演 ー体育館を劇場空間へー

山梨 雅枝¹⁾

1) 仙台大学体育学部

事例報告

コロナ禍における学内ダンス公演 — 体育館を劇場空間へ —

山梨 雅枝¹⁾

1) 仙台大学体育学部

Masae Yamanashi¹⁾ : On-Campus Dance Performance at COVID-19 pandemic period- Turning the Gymnasium into a Theater Space : Bulletin of Sendai University, 53 (1) : 51-62, September, 2021.

1) Sendai University Faculty of Sports Science

Abstract: This report describes the process and management of the dance performance organized by the University of S in the COVID-19 pandemic period.

For holding a performance in the COVID-19 pandemic period, the executive committee members received training on infection prevention measures. Based on this training, an executive committee meeting was held. Only students from the University of S participated in this performance. The performances were held in a gymnasium of campus instead of a public theater and distributed by live streaming online without audience.

In order to transform the university's gymnasium into a stage space, it was necessary to set up lighting, sound equipment and stage curtains.

In addition, it was necessary to apply for the copyright of the music and secure a stable Internet connection for online distribution.

As a result, the average number of viewers for this online performance was higher than the usual number of visiting audiences, it is considered that there were people who cannot easily visit the theater, such as family and friends who live far away had watched the performance.

Rather than canceling the dance performance due to the COVID-19 pandemic period, it became an opportunity to discover the possibilities of using university facilities, as we searched for how to hold the performance and what would be the best alternative form of holding it.

We expected that this initiative will not only serve as a model for holding dance performances in the COVID-19 pandemic period but will also lead to other opportunities for theater education, such as the use of school facilities and programs in collaboration with local public facilities.

KEYWORD Campus Facilities, Live Streaming, Infection control measures

キーワード 学内施設, ライブ配信, 感染防止対策

I. はじめに

2019年12月以降に中華人民共和国湖北省武漢市で初めて報告された新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）は、数か月で世界的に流行が拡大した。2020年2月11日に世界保健機

関（World Health Organization, WHO）は新型コロナウイルス感染症の正式名称を「COVID-19 (coronavirus disease 2019)」と定め¹⁾、2020年3月11日には同機関がパンデミックを宣言した。

COVID-19禍で、催物（イベント等）の開催や施設の利用が制限される中、文化庁は

2020年9月30日～10月13日の14日間にかけて「文化芸術活動に携わる方々へのアンケート」を実施し、79.8%が「既に決まっていた仕事の機会がなくなった（中止・延期された）」と回答しているⁱⁱ。それから半年以上経過した2021年5月現在、日本においても東京、京都、大阪などの9都道府県で緊急事態宣言が発令されておりⁱⁱⁱ、COVID-19の感染の収束には至っていない。しかしながら、大規模公演を中心に文化芸術活動は多様な形態による実践例も報告されている^{iv}。しかしながら、ダンス発表会などの小規模公演の事例報告の蓄積は未だなされておらず、現在は公演の開催方法を模索している状況である。

本報告では、2021年2月5日にS大学主催であり、かつS大学のCER事業であるダンス公演「DAN DAN DANCE & SPORTS 17th」において、COVID-19で例年通りの劇場開催がリスク管理の観点から回避された結果、副次的にS大学施設である体育館利用が模索され、公演が実施された経緯とその運営方法について報告したい。

II. 「DAN DAN DANCE & SPORTS」について

II-1 「DAN DAN DANCE & SPORTS」の目的

「DAN DAN DANCE & SPORTS」（以下、DDD）は、身体文化を通じた交流を目指す劇場公演として2005年からは公共ホール（仙南芸術文化センター えずこホール）で開催される宮城県仙南地方の唯一のダンス公演である。

教育機関でのダンスの発表の場の多くは、運動会や文化祭などで校庭や体育館を利用した発表形態が多く、本格的な照明や音響効果といった設備が充実しているとは言えない環境で実施されるケースがほとんどである。そもそも学校教育において、ダンスなどの身体表現を行う機会の位置づけは、発表会としての性格が強く、舞台上の演出効果などを踏まえた総合的な舞台づくりを目的としてはいないためであろう。また、部活動などにおいてはダンス披露の場としてコンクールへの参加などがあげられる。学校単位

で出場する代表的コンクールは、日本女子体育大学主催「全国中学校・高等学校ダンスコンクール」（1948年より開催）や日本女子体育連盟・神戸市教育委員会主催「全日本高校・大学ダンスフェスティバル・神戸」（1987年より開催）のものなど富山県主催の「アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ」（1998年より開催）などがあげられる。しかしこれらのコンクールは学校の垣根を超え切磋琢磨できる機会として「ダンス甲子園」^vに例えられ、競技としての舞台と言える。その為、照明の効果など舞台演出を練り上げ、「観るもの」としての作品づくりが充分とはいえない。DDDは、“劇場”という非日常的な空間で観客を前にして身体表現することの意義や価値について学ぶ機会を提供するものであり、公演としての意味合いが強い舞台である。また、S大学学生はもとより、DDDの公演形態に賛同し継続的に参加している教育関係団体が多いことがあげられる。

昨年度で17回目となるDDDは、2005年の第1回目の公演開催から、これまで毎年開催されてきた公演である。以下に開催日と開催場所をまとめた。

表1【DDD 公演開催日及び開催場所】

回	公演開催日	開催場所	
1	2005年1月22日(土)	えずこホール	大ホール
2	2006年1月14日(土)	えずこホール	大ホール
3	2007年1月27日(土)	えずこホール	大ホール
4	2008年1月26日(土)	えずこホール	大ホール
5	2009年1月24日(土)	えずこホール	大ホール
6	2010年1月23日(土)	えずこホール	大ホール
7	2011年1月29日(土)	えずこホール	大ホール
8	2012年1月28日(土)	えずこホール	大ホール
9	2013年1月26日(土)	えずこホール	大ホール
10	2014年1月25日(土)	えずこホール	大ホール
11	2015年1月24日(土)	えずこホール	大ホール
12	2016年1月23日(土)	えずこホール	大ホール
13	2017年1月28日(土)	えずこホール	大ホール
14	2018年1月27日(土)	えずこホール	大ホール
15	2019年1月26日(土)	大河原えずこホール	大ホール
16	2020年1月25日(土)	大河原えずこホール	大ホール
17	2021年2月5日(金)	仙台大学	第4体育館よりライブ配信

DDDの開催日は、第1回目の公演からS大学の春休み直前の週末に設定されており、毎年同じ時期に開催することで、参加者にDDDの開催時期を認識してもらうことができた。今年度に限ってはCOVID-19禍の公演準備に余裕をもつため、例年よりも10日程遅い日程で開催された。

II-2 DDD実行委員会

DDD実行委員会（以下、実行委員会）は、S大学の有志学生で構成される組織であり、毎年開催年度の9月から運営を開始する。有志で構成される実行委員は、学年や学科の垣根を越えてDDDの成功を目指して共に活動している。実行委員会は、公演テーマの設定や広報活動、参加者の管理など公演の事前運営全体を担うと共に当日の運営業務を担当する。

2020年度の実行委員は、学生4名であり例年に比べてかなり少人数で構成された（2019年度は9名）。これは、COVID-19禍で実行委員が集まる際に密を避けることと情報共有がより迅速に行われることを目的とした為である。また、

例年実行委員長は4年生が担うが、今年度は初の3年生が実行委員長を担い、他の委員も3年生であった。今年度は、COVID-19禍の開催となるため、例年よりも1ヵ月早い2020年8月から第17期となる4人のメンバーと共に「ケガ人もゼロ、COVID-19もゼロ」をスローガンに掲げ、2021年2月5日の公演本番に向けて実行委員会が始動した。

III. 公演開催における COVID-19 感染拡大防止策

III-1 COVID-19感染拡大防止策の研修

2020年度の実行委員が組織された時点では、COVID-19禍における公演開催方法についての前例がほとんどなく、具体的な運営方法などの情報を掴みきれずにいたため2020年8月26日に宮城舞台技術者協会主催の感染防止対策研修である「バックステージツアー」に参加した。

この研修では、参加者が観客の立場で入館時点から主催者側のCOVID-19対策を体験することで、入館に際しての一連の流れを掴むことが

き、主催者としての公演運営についての知識を得ることができた。

宮城舞台技術者協会主催「バックステージツ

アー」の研修で行われたCOVID-19禍での劇場入館から着席までの流れは表2の通りである。

表2【入館時の観客の動きとスタッフの対応】

手順	観客の動き	目的①	目的②	スタッフの動き
1	入館時、新型コロナウイルス接触確認アプリ(COCOA)・みやぎお知らせコロナアプリ(MICA)の登録及び起動	COVID-19感染者状況を確認する		マスク及びフェイスシールドを着用し対応
2	検温	体調確認		
3	手指消毒	ウイルスの除去		
4	事前にチケット裏面に個人情報を書き込み、当日、入館時に自身でチケットのもぎり、所定の箱に入れる	事前記入は、当日の密を避ける目的があり、自信でのもぎりは、物を介した接触を避ける	座席は事前に個人情報を登録し、座席を指定する。感染者が出た場合、発生源及びその周辺に着席していた人物を早期に限定する	マスク及びフェイスシールドを着用し対応
5	次亜塩素酸で足裏消毒	床面からのウイルスを除去する		
6	客席入室時の入り口方向の徹底	扉での対面接触を避ける		
7	トイレ利用前後の手指消毒及び足裏消毒	ウイルスの除去		
8	事前に指定された場所に着席する。	密や飛沫を避ける		椅子使用の制限について表示する

また、運営スタッフ及び出演者の側のCOVID-19対策として、検温^{vi}、手指消毒、楽屋での換気及びソーシャル・ディスタンスの確保、化粧品の共有の禁止、ケーティングの禁止などが挙げられた。

これらは今後、劇場利用時の「新常識」として一般化していくと考えられる。

Ⅲ-2 学内公演の決定

実行委員は、宮城舞台技術者協会主催「バックステージツアー」で、コロナ禍での舞台公演開催における知識及び具体的な運営方法についての知識を得ることができた。この情報をもとに2020年8月26日に開催された第1回目実行委員会にてDDD17thの参加団体は、S大学学生の

みとし、外部の参加は見送ることにした。参加団体を限定した第1の理由としては、学外部者の健康管理や感染予防対策について、実行委員だけでは管理が行き届かない可能性が高いためである。

また、2020年10月8日の第3回実行委員会では、開催場所を公共ホールではなく学内の体育館で実施することが決定した。その理由としては、劇場のように広い空間を限られたスタッフで定期的に除菌を行うことが困難であることがあげられた。公演の開催には、リハーサルから本番まで劇場内に留まる時間が長い待機場所を分散する必要があったが、その分除菌をする場所も必然的に多くなることが予想された。10月の時点では、劇場を利用したダンス公演開催の

事例も少なく、COVID-19禍での公演運営の細かい部分については手探りの状況であった。そのためDDD17thは学内で、かつ無観客で開催することが決定した。

学内での開催にあたり、開催日は2021年2月5日となった。また使用する施設は、ダンスフロアとして設計されているS大学第4体育館（以下、4体）に決定した。

Ⅲ-3 学内公演に向けての感染防止対策

宮城舞台技術者協会主催の感染防止対策研

修「バックステージツアー」の情報をもとに、DDDにおける感染防止のためのガイドラインを作成した。このガイドラインは18項目から成り、日々の健康管理と4人以上集まったの会食の自粛、マスク会食の徹底、施設利用時の手指消毒と足裏消毒の徹底、入場時の動線の管理、楽屋での座席指定と換気及び消毒の徹底などを設定した。

DDD17thにおけるCOVID-19感染防止のためのガイドラインは以下の表の通りである。

表3【DDD17thにおけるCOVID-19感染防止のためのガイドライン】

1. 健康管理について
・日々の大学の健康チェックを欠かさず行い、手指消毒をこまめにする。
・外出時（特に公共交通機関の利用等）や人に会う時はマスクを着用する。
・軽い風邪症状（喉の痛みだけ、咳だけ、発熱だけ）を含め、体調に変調をきたした場合は速やかに担当の教員に連絡をとり、指示を仰ぐ。その上で、医療機関を受診し体力の回復に努める。
2. 感染防止について
・リハーサル/本番の移動時、待機時にはソーシャルディスタンスを保つ。
・出演時はマウスシールドを着用し、出演前後は速やかにマスクを着用する。
・メイク道具の共有はしない。
・練習後や公演後の打ち上げは行わない。
・4人以上での会食は禁止とする。
・会食する場合には、向かい合わせには着席せず、大皿からの取り分けなどは行わない。また食事中でも、会話をしている際にはマスクを着用し飛沫防止に努める。
・何も触っていないと思っても、1時間に1回は手指消毒をする。
3. 施設利用について
・4体階段側扉を「入口」音楽室側を「出口」として利用する。
・4体演習室は入口側が「入口」、トイレ側を「出口」として利用する。
・あまびえの用紙が貼ってある箇所には着席しない。
・トイレは第四体育館一階、二階奥のトイレを利用する。
・トイレ使用後は、専用の除菌スプレーで足裏消毒を行う。
・女子の着替えは第4体育館一階奥の演習室、男子の着替えは一階の山梨研究室を利用する。早着替えがある場合は、第4体育館に設置された簡易更衣室を利用する。
・軽食及び昼食は、持参したものであっても学食で間隔をあけて着席する。
・体育館には蓋付きの飲み物のみ持ち込みを許可するが、会話をしながら飲まない。

特に前日リハーサル及び公演当日は、学内で使用可能なトイレを限定し、こまめに除菌を実施した。また、食事を摂る場所は、学食に限定しソーシャルディスタンスが保たれる環境での飲食を認めた。

4体のダンスフロアには公演当日の2ヵ月前から練習のためにレンタルしたりノリウムが敷かれており、COVID-19感染防止のために使用前後に次亜塩素酸水での消毒を毎回実施した^{vii}。

IV. S大学施設を利用したオンラインダンス公演

IV-1 4体の付帯設備

今回、体育館でダンス公演の実施が決定した直後から、実行委員は4体^{viii}を舞台空間につくり替えるための要素を3つあげ、実際にどの程度設置することが可能であるか検討を重ねてきた。この要素は、4体に限らず体育館を舞台空間にする際にも共通する事柄であると言える。その要素とは、まず床にリノリウムを敷くことである。リノリウムは、滑り止めの効果と照明をより際立たせる効果がある。2つ目は、照明である。照明は、ダンス作品の演出をする際、大きな役割を果たし、作品世界の表現を広げる効果が得られる。3つ目は、幕である。幕は、空間を限定する枠の役割を果たし、さらに照明の効果を高める役割もある。

4体には簡単な照明を除き、これらの設備がなかったため、設置が可能であるが検証する必要があった。

まずリノリウムについては、4体に幅8間、奥行7間分^{ix}のリノリウムを敷くことができた^x。この広さは、偶然にもこれまでの開催会場であるえぞこホールの舞台の広さと全く同じであった。

2020年10月21日（水）には、DDDを担当する舞台監督^{xi}と本学営繕管理課（現：施設管理課）と共に4体の電気回路について確認した。そこで、この体育館が構造的にはコンセットの配置が劇場と同じつくりになっていることが判明した。しかしながら、電力量力や耐久性については、さらに確認が必要であった。

また、2021年1月20日に舞台監督と共に、4体ダンスフロアの照明用バトンを確認した。ここでの確認内容は、実際に照明用バトンに滑車で袖幕を吊るすことができるかどうかや仕込みの手順や照明用バトンの耐久性について確認した。舞台監督の石井忍氏よれば、S大学施設での初めての舞台づくりとなるため、検証が必須であったとのことであった^{xii}。この検証の結果、本学の4体に袖幕及び大黒幕が設置できることが明らかとなった。

4体のダンスフロアは、フローリングの床と

収音壁で片面全体に鏡が設置され、反対側の壁にはバレエ・バーが設置されており、ダンス授業及び練習には適した環境ではあるものの、いわゆる体育館といった感じは否めない。

そのため、舞台空間を創り上げるためには、体育館的要素をいかに払拭するかという点が課題となった。それは同時にいかにして幕を設置するかという問題でもあった。舞台空間において、幕は重要な役割があり、その1つに出演者が出番を待つための待機の姿などが客席側から隠す効果があげられる。加えて、スモークマシンや、照明、ステージサイドスピーカーなどの機材を隠す役割もある。また、舞台に奥行や照明の色を際立たせるため効果もあり、幕の設置は必須であった。

IV-2 幕と照明の設置について

4体ダンスフロアの天上には照明バトンが備え付けてあり、照明6本の照明が常設されている。このバトンを利用し、短管パイプに固定した袖幕を船の帆をあげる要領でカラビナと滑車を付け、ロープで袖幕を引き上げる方法で舞台両脇に4枚ずつ計8枚と舞台最後部に大黒幕6枚と白幕^{xiii}（今回はジョーゼット幕を使用）4枚を吊るした。また、ダンスフロアと新体操場の間にキャットウォークがあり、そこから舞台を縁取るように絞り緞帳^{xiv}のイメージでジョーゼットのアーチ幕を吊るした。

また4体は、照明用バトンに吊るされたGE球が6台常設されている。このGE球は一般照明と呼ばれ、オレンジ色の柔らかい色合いのものである。DDDのように多様なダンスジャンルが上演される公演においては、さまざまな色や舞台効果を求められるため、今回は使用しなかった。しかし、ローリングタワーと呼ばれるローラー付の大型の脚立があれば、4体に常設されている照明用バーを利用して照明を吊るすことが可能であることが判明したため、レンタルでLEDムービングライトを11台設置した。

今回、LED球を使用した最大の理由は、限られた電力の中で照明効果を最大限活かすためであった。LED球は、GE球よりも電力を必要としないため、限られた電力で照明をより多く

設置することが可能であり、舞台空間に多くの色や模様を演出することが出来るという利点がある。また、通常の舞台では、照明用のバターンは作業しやすい位置まで降ろすことが可能であるが、4体の照明用のバターンは天井に固定されており、バターンを降ろすことが出来なかった。そのため本公演では、ローリングタワーに登って照明を1つ1つ設置した。照明は、作品によって当てる方向などが異なるため、GE球では作品の合間に再度ローリングタワーに登り照明の位置や角度を変更しなければならず、DDDのように多様なダンスジャンルが舞台にあがる公演において、この作業は時間的にも作業効率的に現実的ではなかった。しかし、LED球はコンピューター管理が可能であり、プログラミングによって遠隔で照明の向きや色、模様までも変えることが可能であった。

このように照明の色や模様を舞台上で際立たせるためには、水平^{xv}に白い幕が必要であった。今回は、大黒幕の間に3枚のジョーゼット幕を4枚吊るすことで、白幕の役割を果たした。これにより舞台上に様々な配色を施すことができ、深みのある演出が可能になった。また舞台前両脇にもLEDムービングライトを2台設置したため、舞台上部を縁取っているアーチ幕に作品の内容や雰囲気合った演出がおこなえるようになった。さらに、舞台前方上部^{xvi}から単独で追えるようにLEDスポットライトを1台設置し、ソロで踊る人物を際立たせるなどの効果も得られた。



図1【舞台の様子と照明卓】

IV-3 音響設備及び音源について

音響設備は、4体に常設されているデッキを使用した。このデッキは、CD、MC、音源デバイスを再生できるデッキであるが、DDDでは、各作品音源をCD-Rで音響担当（外注）に委託し再生した。

通常の舞台では、客席に聞こえる音はと舞台上に聞こえる音の時差をなくすために客席用スピーカー他に舞台両袖に返し用のステージサイドスピーカーが設置されている。4体には、備えつけのスピーカーが体育館の四隅に設置されていたが、幕の設置により舞台と同様の現象が起こるため、返し用のステージサイドスピーカーを2台レンタルし両袖幕に設置した。

4体での公演開催にあたり、4体付帯設備及び備品と外部から借用した備品等^{xvii}を表4にまとめた。

表4【学内公演における設備及び備品】（有限会社舞台監督工房の石井忍氏と小林道子氏へのインタビューをもとに作成）

S大学の設備及び備品等		外部借用の備品等	
品名	個数	品名	個数
ローリングタワー	1台	リノリウム	14枚
バーベル 10 kg	16個	返し用（両袖幕）スピーカー	2台
音響機材	1台	大黒幕	1枚
スピーカー	4台	袖幕	8枚
照明吊り下げバー	4本	ジョーゼット幕	4本
		スモークマシン	1台
		単管パイプ	14本
		滑車付きローリングタワー	1台
		LEDムービングライト	13台
		LEDスポットライト	1台

V. 学内施設よりライブ配信

V-1 舞台芸術作品のオンライン配信

片岡（1980）は、「芸術作品は、〔中略〕作者の自己目的な産物であるが、そこで完了はせず、〔中略〕舞踊でいえば上演という形をとって、外に対して開かれたとき、つまり鑑賞者の解釈を待って初め完成する」と述べ、芸術作品には鑑賞者と表現者とが存在し、ダンスにも必ずこの二者が必要であると指摘している通り、公演形態が無観客であったとしても録画データを配信するなど、作品を発表する場が必要であると言える。2020年はCOVID-19の感染拡大によって、ダンス公演だけでなく音楽や演劇などの舞台芸術で舞台と観客を繋ぐための方法が示された。

DDD17thにおいても、2020年11月5日の第4回実行委員会にて、公演の配信方法について検討がなされた。ここではライブ配信によって間接的であれ、観客と時間を共にする喜びや緊張感を味わい、人と人が繋がることのできるDDDの在り方について前例などを踏まえて意見が出された。

前例として、毎年4月末から5月上旬にかけて静岡市で開かれる「ふじのくに↑↓せかい演劇祭」があげられる。同祭は、COVID-19の感染拡大を受けて今回「くものうえ↑↓せかい演劇祭2020」と称し、2020年4月25日から5月6日の間オンラインで開催された。この上演方法に関し、SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督の宮城聡は、Youtubeでメッセージを配信し、生の上演を蟹に、オンラインでの配信を蟹かまぼこにたとえ代替案としての「演劇蟹かまぼこ」を提示した。また、オンライン配信は、歌舞伎座が2020年4月17日に無観客の歌舞伎座での収録を配信している^{xviii}。この方法は、情報を提供することに特化して、ライブとしての緊張感や時間を共にする共振性は生まれにくい。しかし、短時間での対応を迫られるなかで過去の公演の録画や新たに動画撮影してオンライン上に投稿する方法は多くの団体で採用された。

一方で、ライブ配信というかたちで、空間を共有することはできなくとも、時間を共有する

ことが可能なオンラインによって繋がる方法として、新国立劇場の取り組みがあげられる。同劇場は、日本2021年1月11日に「ニューイヤー・バレエ」を無観客ライブ配信で実施した^{xix}。しかしながら、オンデマンド形式であろうとライブ形式であろうとオンラインでの公演は劇場公演が中止となった代替案であり、まさに舞台芸術の「蟹かまぼこ」であった^{xx}。

この点からすればDDD17thも「蟹かまぼこ」であることは否めない。しかし、実行委員は「最高の蟹かまぼこをつくることはできる」と、「蟹かまぼこ」の強みを生かす公演づくりを目指した。

V-2 DDD オンライン配信

無観客での公演実施が決定したため、ライブ配信に向けて2020年11月25日、S大学公式Youtubeチャンネルからの本公演のライブ配信につて、S大学ホームページ委員会との話し合いがもたれ、同委員会の協力のもと2021年1月27日に動画配信業者^{xxi}との4体のネット環境等について確認された。DDD17thのライブ配信のためのインターネット回線は、S大学の回線を利用した。

S大学の回線を利用するにあたり、S大学のPCを使用して配信を行う必要があった。その為、配信業者が使用しているソフトなどがS大学のPCに正しくインストールされるかなどの検証をおこなった。以下に、S大学の機材及び設備と、外部から借用した機材及び設備を一覧にまとめた。

コロナ禍における学内ダンス公演

表5 【オンライン配信における機材及び設備】（株式会社アートプロの浅野佳祐氏へのインタビューをもとに作成）

S大学の機材及び設備		外部借用の機材及び設備	
品名	個数	品名	個数
インターネット回線（有線）	—	カメラ	3台
配信用パソコン	1台	PV再生用モニター	1台
配信確認用パソコン	1台	スイッチング用モニター	1台
		音声調整用ミキサー	1台
		無線配信用機器（バックアップ用）	1台
		au・ドコモインターネット予備回線	—



図2 【カメラと映像配信用モニター】

一般的にオンライン配信には、劇場公演にある「休憩時間」というものがないため、視聴者が映像を飽きずに公演を観ることができるよう、テンポよく画像を切り替える工夫を行った。その為、スイッチング用モニターを設置し、事前に収録した動画（オープニング動画、タイトル画像及び音声によるタイトル紹介動画、過去のDDD紹介動画、卒業生のダンス動画、附属高校ダンス動画等）をオンラインの動画とスイッチ

させるかたちで配信した。

また、Youtubeからのライブ配信を行うにあたり、事前に使用曲の著作権^{xxiii}及び著作隣接権^{xxiiii}の申請が必要であった。音源によっては、使用料が高額のもの^{xxiv}やYoutubeでの使用を禁止しているレコード会社^{xxv}もあり、その会社の音源を使用する作品には急遽、音源自体を変更するなどの対応を依頼するケースがあった。

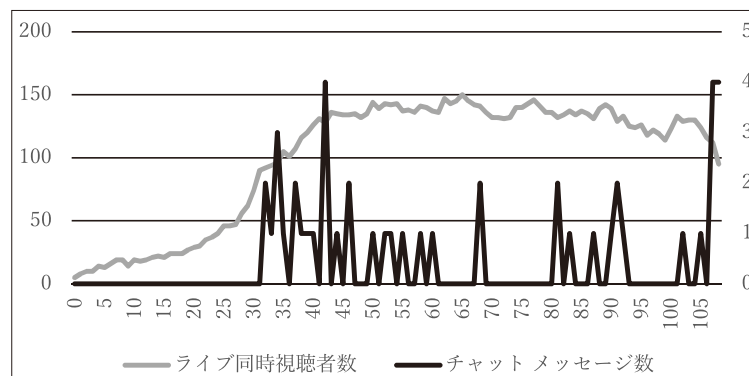


図3 【DAN DAN DANCE & SPORTS 17th 視聴状況】（仙台大学ホームページ運営委員会作成）

図3は、DDD17thのオンライン公演の視聴状況を示したものである。

オンライン公演開始ご35分後には視聴者が150人となり、78分間の公演のうち平均視聴者数は131名であった。この数値は、通常の来場者数を上回る数であり、遠方に住んでいる家族や友人など、なかなか劇場に足を運べない方たちの視聴があったものと考えられる。

VI おわりに

これまで、DDDにおいても大学施設を利用してのダンス公演を開催した例がなく、実際にどの程度まで劇場に近い舞台空間をつくり出せるのか、学内公演が決定したものの検証すべき課題が多く存在した。そのため、大学関係施設職員及び舞台監督との現場下見を設備ごとに実施し、検証をおこなった。この下見から本番、そして撤収までの流れは、表6の通りである。

表6【オンライン公演までの流れ】

日 時	主な実施内容
2020年10月21日	舞台監督と営繕管理室職員立ち合いのもと、電源回路の確認
2021年1月20日	舞台監督と照明用バトンの耐久性及び袖幕を吊る手順を確認
2021年1月27日	配信業者とホームページ運営委員会委員とでインターネット配信について現場下見
2021年2月3日	舞台仕込み 幕の設置
2021年2月4日	照明仕込み 照明の設置／リハーサル実施
2021年2月5日	DANDANDANCE & SPORTS17th ライブ配信／会場撤収作業
2021年2月8日	会場撤収作業

COVID-19禍の公演開催にはリスクが伴うため、DDD17thの開催決定を決めた時から、実行委員には常に本公演の運営に関して辞退することが可能であることを伝えてきた。そんな中、DDD17th開催の直前の2020年12月末に隣県のH大学のダンス公演でCOVID-19のクラスターが発生し、大きく報道された。この報道は、COVID-19禍における公演開催のリスクを思い知らされ、年明けに改めてDDD17thの実行委員及び出演者全員に運営及び出演の辞退希望に関する聞き取り調査を実施した。辞退者は出なかったものの、それから約1週間後の2021年1月18日から24日にかけてS大学内感染拡大防止策として入構制限が発令され、公演の練習及び公演の準備を中断せざるを得ない状況となった。振り返れば、公演が無事に開催できるのか、COVID-19禍で公演を開催することは正しいことなのか、実行委員と悩み続け、励まし合った半年だった。公演が「ケガ人もゼロ、COVID-19もゼロ」で終えられたのは、実行委

員はじめ全ての出演者がダンスで表現したいという強い思いがあったからこそである。

COVID-19禍でDDD17thを中止するのではなく、どうすれば開催することができるのか、そして開催するからには最高の「蟹かまぼこ」にするにはどうすればよいのかを模索するなかで、付随的に大学施設活用の可能性を発見する機会となった。

本公演の取り組みが単にCOVID-19禍でのダンス公演を開催する際の1つのモデルとしてだけでなく、学校施設などの活用や地域の公共施設との連携プログラムなど、劇場教育の場に繋がることを期待している。

謝辞

本公演を開催するにあたり、本学理事長及び学長、関係部署の方々、郡山孝幸先生にご協力頂きました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

また、体育館を劇場空間へと見事に造り替えて下さった、有限会社舞台監督工房の石井忍氏と小林道子氏及びスタッフの皆様、株式会社東北共立の其田創氏、本公演初のオンライン公演を手掛けてくださった株式会社ビデオアートプロの皆様、アドバイザーとして支えて下さった仙南芸術文化センター（えずこホール）の星井理賢氏には、衷心より感謝申し上げます。

最後に、COVID-19禍で自分の役割以上の業務をこなしてくれた実行委員及び運営に協力してくれた学生に感謝を述べたいと思います。

注

ⁱ NIID 国立感染症研究所「国内初の新型コロナウイルスのヒト-ヒト感染事例」

ⁱⁱ 文化庁文化経済・国際課担当「『化芸術に活動に携わる方々へのアンケート』の調査結果」

ⁱⁱⁱ 内閣官房「新型コロナウイルス感染症対策」（2021年5月21日発出）

^{iv} 詳しくは、萩原健（2020）「コロナ禍を受けたオンライン（と）劇場、その発展—変容する／再発見される〈劇場〉—」日本演劇学会紀要 pp.35-50を参照されたい。

^v 「ダンス甲子園」のフレーズは、全日本高校・大学ダンスフェスティバル・神戸のHPに掲載されている。

^{vi} 舞台監督の石井氏によれば、仙台市の全ての劇場には、サーマルカメラ（非接触体表面温度測定器）が常設されているとこのとであった。（2021年5月25日のインタビューより）

^{vii} 次亜塩素酸水の生成機をS大学が保有していた為、営繕管理室（現：施設管理課）の許可を得て使用した。

^{viii} S大学施設である4体はダンスフロアと新体操フロアから成る。

^{ix} 尺貫法とは、長さの単位を尺とし、体積の単位を升、重さの単位を貫とする度量衡法。1959年のメートル法の施行で廃止されたが、舞台では慣例として主に長さの単位が使われている。1尺=30.303cm。舞台の間口は間で表す。1間=6尺。間瀬勝一（監）（2014）p.41

^x 4体のダンスフロアの広さは3120㎡である。

^{xi} 2014年の第10回公演より、有限会社舞台監督工房に依頼している。

^{xii} 2021年5月25日に舞台監督の石井忍氏と小林道子氏にインタビューをおこなった。

^{xiii} 舞台最後部の大黒幕は、バレエ等の奥行を多く必要とする演目のバックとなり、白幕は、照明で変化を付けることが可能なため、本公演では、大黒幕と白幕を交互に吊るした。

^{xiv} 緞帳とは、舞台と客席の間を区切るために、プロセニウムの後ろで昇降される幕のこと。間瀬勝一（監）（2014）p.58

^{xv} ホリゾンとは、舞台の最後部にあり、屋外場面の背景に天空などの効果を与えたり、舞台後方や側方及び上方をマスクしたり、プロジェクター等によって映像を投影するなどの機能がある。一般的には、平面で帆布やビニール系の布地の幕を使用する。間瀬勝一（監）（2014）p.74

^{xvi} 舞台前より13m後方にローリングタワーを設置し、その上からLEDスポットライトを手動で操作した。

^{xvii} DDD17thでは舞台設営に必要な機材や備品のほとんどをレンタルしたため、1枚約30kgある袖幕を14枚と照明機材などを全て会場となる2階の4体まで担いで階段を上がる必要があった。この搬入搬出作業及び設営の補助をS大学ラグビー部の有志4名が担当した。

^{xviii} 歌舞伎座は2020年4月6日に歌舞伎公式総合サイト「歌舞伎美人」にて、公演中止となった「三月大歌舞伎」を無観客の歌舞伎座で収録された全7作品を2020年4月17日から4月26日の期間限定でYoutube松竹チャンネルから無料配信することを発表した。

^{xix} 新国立劇場は、2021年1月8日に当劇場のホームページにて、同年1月9日から1月11日に上演予定であった「ニューイヤー・バレエ」の公演関係者の1名がコロナ感染したため、公演中止の発表をした。また、2021年1月11日に「ニューイヤー・バレエ」を無観客で上演し、無料でライブ配信する告知をしている。

^{xx} 大学主催のダンス公演としては、2021年1月19日に日本女子体育大学第19回舞踊学専攻卒業公演が府中の森芸術劇場からライブ配信された。

^{xxi} 事前動画及びライブ映像の配信及び記録用

DVDの作成業務を株式会社ビデオアートプロに依頼した。

^{xxii} 一般社団法人日本音楽著作権協会(JASRAC)などが管理している。

^{xxiii} 各レコード会社が管理している。

^{xxiv} 音源の使用料は1曲につき5,000円のレコード会社もあれば、1曲30,000円のレコード会社もあった。

^{xxv} ソニー・ミュージックが管理する音源は全てYoutubeの使用を認めていなかった。

・全日本高校・大学ダンスフェスティバル・神戸 HP <https://www.ajdf.jp/> (最終閲覧日:2021年5月25日)

・文化庁文化経済・国際課担当「『文化芸術活動に携わる方々へのアンケート』の調査結果」https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/92738101_02.pdf(最終閲覧日:2021年5月18日)

・内閣官房「新型コロナウイルス感染症対策」<https://corona.go.jp/emergency/> (最終閲覧日:2021年5月18日)

・内閣官房「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の地域変更」(2021年5月21日発出)
https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitaisengen_houku_20210514.pdf?202105281000 (最終閲覧日:2021年7月1日)

・NIID 国立感染症研究所「国内初の新型コロナウイルスのヒト-ヒト感染事例」<https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/2488-idsc/iasr-news/9425-481p02.html> (最終閲覧日:2021年5月18日)

・SPAC-静岡県舞台芸術センターチャンネル「『ふじのくににせいかい演劇祭2020』中止にあたって宮城聡からのメッセージ」<https://www.youtube.com/watch?v=dHaB-XVExck> (最終閲覧日:2021年5月31日)

引用参考文献

- ・片岡康子 (1980)『舞踊学講義』大修館書店 p.99
- ・嶋田直哉 (2020)「オンライン演劇の可能性—『新しい生活様式』とリアルの変容」『悲劇喜劇』第73巻第5号 pp. 51-55
- ・間瀬勝一 (監) (2014)『劇場・音楽堂等で働く人のための舞台用語ハンドブック』公益社団法人全国公立文化施設協会 p.41, p.58, p.74
- ・宮城總・平田オリザ (2020)「対談 危機と劇場」『悲劇喜劇』早川書房 第73巻第5号 pp. 9-27
- ・萩原健 (2020)「コロナ禍を受けたオンライン (と) 劇場、その発展—変容する/再発見される〈劇場〉—」演劇学論集 日本演劇学会紀要 71巻 pp.35-50
- ・平川大作 (2020)「報告:新型コロナウイルス感染症と演劇」演劇学論集 日本演劇学会紀要 71巻 pp. 51-61

(2021年 5月31日受付)
(2021年 7月21日受理)

